



ハハコグサ (母子草) という名前は どうして ついたの

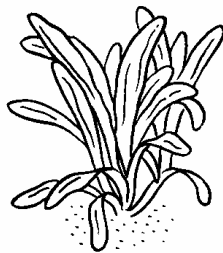
ホオコグサがなまって、ハハコグサに

9世紀中ごろの文徳天皇の時代に、それまでホオコグサとよんでいたものを、ハハコグサ(母子草)とよびはじめました。元は、奈良時代に入ってきた、中国の学者の書いた、植物の参考書にあった漢字からきた名前です。古い書物には、波波子と書いてあるものもあります。漢字の意味とも、母と子という意味とも、関係はなかったようです。それが、いつの間にか、母親と子どもの意味に、変わっていったものです。

「古い苗に若苗がよりそって生ずるから、母子という名がつけられた」と書いている古い書物もあるそうですが、植物学者だった牧野富太郎さんは、これはこじつけであると、はっきりと言いきっています。

春の七草の和歌

「せり なずな 御行(ごぎょう、おぎょう) はこべら 仏の座 すずな すずしろ これぞ七草」。春の七草をうたいこんだ有名な歌です。旧暦の正月(今の暦では2月10日ごろ)にお祝いとして食べていました。歌の中の「ごぎょう、おぎょう」は、今のハハコグサにあたります。(監修・中山 周平)



ハハコグサの春の姿

